



たい
した
ね
も
ん
で
す



未来は、東港のふ頭で始まっていた。雑木林のなかの砂利道を抜けると、大きな港が口を開けていた。その視界の一部を塞ぐように、鋼鉄製の巨漢が突如出現する。初めて見るフローティングドック。まるで日常を途絶する要塞。この船の上で巨大なケーソンがつくられていた。内部は未知だらけの異空間。でも案内人の説明を聞いていくうちに、それらのすべてにモノづくりの強い意志と知恵が込められていることに気づく。そう最新のテクノロジーを象徴する巨大なケーソンは、意外にもすべてがハンドメイド。男たちが心血を注ぐ汗の結晶だった。



雑木林の先に、突如現れたフローティングドック。最大3,700tの重量物を載せても浮かんでいられる能力があり、その足元から身をかなりそらして見あげないと、全容が把握できない巨漢ぶりだった。

強度は内部に宿る

この足場を、どこまで登っていくのか。慣れた足取りで先を行く案内人の足元を追い、途中「ゆっくりで、いいですからね」という言葉に励まされながら、足場の最上階に着く。目の前に、気持ちのいい現場が野天の下に広がっていた。4階建てビルほどの高さの足場から、一段下がった低いフロアの全てが、ケーソンだという。開口部は木製の枠で蓋をされていて、拍子抜けするほど安定感のある作業空間である。でも直下に迫る光る水面と、腰に付けた安全ベルトの重みが、ゆるみそうな心を引締める。

フローティングドックはケーソンなど大きな構造物を製作するための設備を備える特殊な船。この上で高さ9m・幅11.2m・長さ25m、総重量約1,400tのケーソンが2函、同時に製作されている。おおまかに、構造体の軸になる鉄筋組み、コンクリートの型枠設置、コンクリート打設、そしてコンクリートの強度をあげる養生などの工程を経て完成する。ただケーソンは巨大なため、高さを4層に分け、底部から同じ工程で繰返す作り、それを順々に積み上げる方式をとっている。この日は海側に建造中のケーソンに、最後のコンクリート打設が行われようとしていた。

一方、陸側のケーソンは鉄筋組みがほぼ終わり、その全容がむきだしになっていた。工事関係者以外、誰も見る事のないケーソンの真髄がそこにあり、神々しいオーラを放っていた。太さや形状が違う鉄筋が整然と生まれ、鉄筋と鉄筋のつなぎ目は、結束線で厳重に結ばれている。荒波の衝撃を受け止めるケーソンのコア中のコア。そのおびただしい数のつなぎ目や、細密に組まれた鉄筋群から技術者の手ワザと誇り、そして忍耐が浮かびあがる。すると無機質な鉄筋が人格をおび、にわかにチャーミングに見えてきた。無骨だけど繊細。寡黙だけど人と自然の関係を、雄弁に語る鉄筋群。近い将来コンクリートのなかに埋もれてしまうだけに、その姿をいつまでも眺め、愛でていたいと思った。





地上に待機しているコンクリートミキサー車から、この写真の中央から左端へ象の鼻のように伸びるホースを通してコンクリートが送られてきて、ケーソンの芯になる鉄筋部分に注入される。直線的な構造物で構成される現場で、ただひとつ生き物のようにうねるホースの様子がかわいかった。

畏れを知る男たちの優しさ

クレーンの作動音が聴こえると、現場が活気づいた。いよいよコンクリートの打設作業が始まる。どこからともなく男たちが集まり、それぞれの持ち場で作業の行方を見つめている。ドックの最上部に据付けられたクレーンのジブがコンクリートの注入ホースを吊り、その筒先を待つ人の頭上付近に運び、それを受け取った人がフックを外し、筒先を型枠のなかに入れコンクリートを流し込む。その筒先の動きにあわせ、支えのロープを引く人もいる。しばらくするとダダダダッ！ダダダダッ！数台のバイブレーターが一齐に稼働し、あたりは大音響に包まれた。注入直後のコンクリートのなかに振動する棒を出し入れしながら、コンクリートを隅々まで充填して締め固める大切な工程。この作業がコンクリートの将来の品質を左右するという。そして振動がやむと、十人近くが足元の型枠の底を凝視しはじめ、そのまわりに張りつめた空気が漂う。コンクリートが均一に入ったかどうか全員で確かめ、先の工程に進められるかどうかを判断するという。観察力と決断力が問われる一瞬である。

この一連の作業は、合図者の指示によって進められた。合図者はホースの筒先を持つ人でハンドフリー無線式マイクをつけ、クレーンのオペレーターに合図を送る。そのやり取りはスピーカーを通して現場全体に聞こえ、全員がクレーンの動きを把握できるようになっている。こうして、お互いの信頼関係と情報共有で現場が進む。察しのいい男たちの機敏な動きに、目を見張る。一方、鉄筋群のなかに、4本の脚を広げる不思議な形の階段を発見。何のためのものか想像をめぐらしていると、偶然にも階段を登り降りしながら鉄筋群のなかを移動してくる人が。その隙のない身のこなしに、いぶし銀のような重厚感がにじみ目を惹いた。

その日の見学終盤、現場の総責任者に一番気をつけていることを聞くと、「マンネリ化」と意外な答え。一瞬、この巨大な現場にしては平凡に聴こえたが、あとに続く説明で納得。「このケーソン製作は同じ工程が、4回繰返し続いていきます。はじめての仕事は誰でも緊張しますが、おなじ作業の繰返しはつい慣れが出てしまい、ちょっとした油断が重大事故につながります。そのために注意喚起を徹底して行っています」。たしかにドックのなかには、いたるところに工事の安全を訴えるサインや仕掛けがあった。まして過酷な自然環境のもとでは、危険が常につきまとう。安全をあたりまえと思って日常を過ごしている者に、突きつけられた現場の畏れだった。そのせいなのか、案内人たちは予想外に優しく紳士的だった。こちらの気持ちを先回りして、親切に対応してくれた。自然の畏れを知る男たちは、自然と人に寛容になるのかもしれない。





ある日の朝。完成したばかりのケーソンを載せ、離岸し港のなかに碇をおろすフローティングドック。大勢の技能員たちがケーソン曳航のために、要所要所をロープをかけている。

ケーソンの船出

2ヶ月間にわたり製作されたケーソンが完成し、仮置場に曳航される朝を迎えた。夜明け間近の6時からフローティングドックの離岸作業を始め、9時頃に進水したケーソンの漏水や水平を確認してから、曳航作業が始まるという。その日は今冬初の冬型の天候になり、現場は日本海から吹く、みぞれまじりの強風に晒されていた。そんな悪天候のなか、ドックが港の中で躯体の半分ほどを沈ませていた。時折、合図者の声が岸壁まで届くが強風に掻き消され、何を指示しているか聴きとれない。係留されていた時より、ドック全体があわただしい気配に包まれ、現場の昂りぶりだけは窺えた。ほどなくして2隻のタグボートがドックに近づき、そのうちの1隻とケーソンがロープでつながれ、ケーソンがドックからゆるゆると航路に引き出された。ケーソンをはさみ前方に曳くタグ、後方に押すタグがー列になり曳航が始まった。そして、約1,400tの巨体は水面を切り裂き白波をたて順調に仮置場に近づいていく。ケーソンの上で、5人の男たちが立ちまっすぐ前方を見据えている。これからの工程を思い浮かべているのか、または達成感を味わっているのか。使命を背負った真新しいケーソンと、その産みの親たちの姿が間近に迫った時は、ほんとうにシビれた。この一瞬を見るために寒風のなかで待ただけのことがある、男たちの凱旋と未来の勇者の旅立ちシーンだった。

仮置場に到着したケーソンは、待機している起重機船の横腹につながれ、陸上に繋いだロープをウインチ操作して所定の位置まで移動し、注水されて一定の深さで沈められた。この一連の作業でも数隻の船の乗組員とケーソン製作現場の技術員たちが、それぞれに絶妙にタイミングを見計らった連携プレーがあり、一瞬の隙のない見事さだった。さらに、その作業を見守る人たちの姿が、随所にあった。離れた場所では測量担当者が、身じろぎもせず終始作業の位置を確認していた。そして1回目のケーソン仮置きが終わるやいなや、フローティングドックの周辺があわただしくなった。「はい、もっと、ゆっくり、ゆっくりね」という合図員のアナウンスとともに、ふたつめのケーソンが動き始める。その後、しばらく緊迫した声が続いたが、最後に大きな笑い声が港に響き渡った。大仕事をやり終えた合図員が、安堵感でふと漏らした喜びだった。しかし仮置場側の現場は、次工程のケーソン仮置き作業があり、まだまだ気を許せない状態。こうして進水場所から仮置場に至る広い水域を見渡してみると、このあたり一帯がひとつの工場の敷地のように思えてきた。

巨大なケーソン製作現場の作業は、すべてが小さなことの積重ねの連続だった。それもすべてに人の手が加わり、まったくの零から手づくりされていた。そして風が吹いても、雪が降っても、一定の安全基準の範囲で現場は動いていく。ケーソン完成をめざし全員がベクトルをあわせ、ただ、ただ直進するのだ。やっぱり土木マンの熱さは、たいしたものである。この男たちの汗の結晶が、未来を着実に変えていることを目の当たりにし、明るい気持ちになった。



■取材・撮影

特定非営利活動法人 いがた湊あねさま倶楽部